七矢七の学園と生活

笹倉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
七矢七の学園と生活

【Ｎコード】
Ｎ９８４３Ｕ

【作者名】
笹倉

【あらすじ】
「遅刻しちゃいました――三ヶ月ほど」
≪学園≫の入学式に三ヶ月遅刻した前代未聞の男、七矢七。
能力者たちが集まる≪学園≫に、
急遽この男が転入してきて――！？

七矢七の遅刻と冒涜

≪一秒一厘一毛一糸一忽一微一繊一沙一塵一埃一渺一漠一模糊一逡巡一須臾一瞬息一弾指一刹那足りとも君に時間は与えない≫
「回らない時計（タイムアウト・エラー）」――［　七矢七　］

＊＊＊

＜関所守＞が一斉に武器を構えた。
何者だ、と問う。
武器の先には――青年。
「いやあ、ちょっと、遅刻しちゃいました――三ヶ月ほど」

□

≪能力≫は不平等である。
天変地異を起こせる能力もあれば、少し物を浮かすのがやっとの

能力もある。
故に、能力者の扱いも不平等であった。
≪学園≫での身分制度は凄まじいものがあった。
しかし、今、その悪しき習慣は封じ込められている。
圧倒的な「王」の存在に因る。
その「王」とは、まさしく七矢七の正面に立っている人物（？）であった。

「入学式は何月何日であったか」
「四月十六日でしたね」
「今、何月何日だ」
「七月十六日ですね」
「≪学園≫をナメてるのか」
「いやあ、まさか、あ、でも、学園長さんが意外と可愛いのにはびっくりです」

≪学園長室≫には、七矢七と、もう一人（もう一つ）――うさぎのぬいぐるみ。うさぎのぬいぐるみから、荘厳な男の声がする。その声は学園長、「王」――竜造寺五右衛門のものであった。声は重々しく、圧倒的なまでの「王」の風格が漂っている。が、如何せん見た目が可愛らしいので、七矢七が威圧感を感じることはなかった。

「とんでもない問題児だな――書類を出せ」
「あ、はい」
「名前は七矢七」
「上から読んでも下から読んでもななやななです」
「ちょっと黙っとれ」
「すいません」

うさぎのぬいぐるみがぱらぱらと書類をめくる。恐らく、「遠隔操作」の魔石を使っているのだろう、と七は思う。それか、ぬいぐるみ自体が「受信機」のどちらかだ。
ううむ、と学園長の声がして。

「七矢七」
「あ、はい、上から読んでも下から読んでもななやなな！　こと七矢七です」
「黙っとれ」
「すいません」
「入学式に月単位で遅刻した者は学園始まって以来はじめてだ」
「前代未聞ですね」
「その通り。嬉しそうな顔をするな」
「いやあ、はい」
「通常、入学式に、能力調査を行う。入学者達に偽りの能力者が居ないか調査するためだ。お前にも行ってもらう。
内容は、能力を使った簡単な試合だ。怪我をすることもない」
「偽りの能力者って、そんなことあるんですか？」
「五年に一人。≪学園≫は外に情報を漏らさんからな」
「大変ですね、マスコミも」
「お前に能力調査を行う必要もないだろうが、規則であるから、我慢してくれ」
「ん？　なんで僕、能力調査する必要ないんですか？」

はあ、とうさぎのぬいぐるみ（学園長）が溜息をつく。

「お前が、＜関所守＞三十人を全て制圧したからだ。＜関所守＞は学園の守護を任された、一級の能力者たちだぞ。
たかが十七歳の坊主に制圧されるとは――お前が天才なのか、＜関所守＞の連中が鍛錬を怠ったのか――」

それ、僕が天才だからですよ、と七矢七は笑う。
うさぎのぬいぐるみ（学園長）は、再び溜息をついた。

七矢七の挨拶と友達

≪　『閻魔』　≫

「閻魔」（オールドデビル）竜造寺五右衛門

＊＊＊

「学園長様直々にとは――」

「ヒデとそのー、なに？　三ヶ月遅刻のやつ？　が試合すンの？」

「試合じゃない、能力調査だよ」

「生徒会の仕事ちゃうやん、それ」

生徒会室には、二人の男。ヒデと呼ばれた男――三百八十二期生徒会長、九十九秀光（つくも／ひでみつ）と、関西弁の男、式色獅子（しきしき／しし）。先ほど送られてきた封筒――「学園長」の判が押されたもの――の中に入っていたのは、一枚の紙。秀光はそれを読んで、はあ、と秀光は溜息をつく。それにしても、学園長意地悪やなあ、と獅子は笑って、封筒の中に入っていた紙を秀光から取り上げ、読み上げる。

「『生徒会長九十九秀光に、七矢七の能力調査を命ずる。時刻は今日十六時より。場所は闘技場。但し、九十九秀光は、能力≪質疑応

答≫を使用することを禁ずる』やって」
「能力を使うなとはね」
「十六時って、後二時間しかないしな」
「七矢七――昨日入ってきたばかりなのに、もう有名人だよ」
「そらそうやろ、＜関所守＞全員ＫＯしてンねんから。ていうか、三ヶ月遅刻っていうのもなあ」
「まあ、まだどんな能力かは知らないけれど。顔も見てない」
「俺は見たで、黒髪で、目え茶色くて、身長はお前と同じくらいで、えらい色白やった。あれはモテるわ」
「イケメンは嫌いだよ」
「俺もや」

お互い彼女おらんしな、と獅子が言うも、秀光はそれを無視して、紙を封筒に丁寧に入れて机に放り投げた。
でもヒデ、俺なンか身長高いし足もそれなりに長いしなンでモテへんのかな、と獅子が聞くと、きっと目立つ金髪で怖がられてるんだよ、と秀光が返す。それから、んー、と伸びをして、少し体を動かしておこうか、相手してくれ、と獅子に声をかける。ええよ、行こか、と獅子がそれに答えて、二人は生徒会室から出て行った。

＊＊＊

「初めまして七矢七です。これから１－Ａの皆と仲良くできたらいいなあ、と思ってます。よろしくお願いします」
ぱちぱちぱち、とまばらな拍手。七は、決して歓迎されてる訳じゃないんだなあ、と思う。

ベタな挨拶をして、七は笑う。１－Ａの担任（女）が、七矢くんはあそこの席ね、と一番後ろの席を指差す。はい、と七矢は示された席に向かって歩き出す。
右隣は空席、左隣は女だった。髪はこげ茶色で、それを後ろでまとめている（ポニーテール、というやつだ）。よろしく、と七が声をかけると、よろしくね、と女が返す。

「あたし、市原。市原一（いちはら／はじめ）。ハジメでいいよ」
「あ、七矢です。七矢七」
「さっき聞いたよ。――ねえ、＜関所守＞全部倒しちゃったって、ほんと？」
「んー……そんなことよりさ、このクラス、何人居るの？」
「話の逸らし方、露骨だね」
「そういう所が僕のいい所なんだよ」

なにそれ、とハジメが笑って、七矢くん合わせて十五人、と答える。
意外と少ないね、と答えると、≪戦争≫やる時に、多過ぎると、色々めんどくさいからじゃないかな、とハジメが答える。

「≪戦争≫って？」
「まあ、普通の学校のテストみたいなもんだよ。そのクラスがどれだけ強いかで、成績つけんの。
クラスを一チームとして、ルール無しで戦争。能力使って良し、好き勝手して良し」
「死人でるよね、それ？」
「≪転生≫の陣の中でやるから、死んでも大丈夫なの」
「ハジメ、何回死んだ？」
「んー、十八回くらいかな」

人生経験豊富だ、と七が笑うと、死ぬって案外簡単なのよ、とハジメも笑った。

「それじゃあ、朝のショートホームルームを終わりにします。この後は各自鍛錬ですので、しっかりやってくださいね、それじゃ！」

担任はそういうと、スタスタと教室から出て行ってしまった。
クラス全体が、はあ、とだらけた雰囲気を醸し出す。男が一人、近寄ってきた。七はよろしくね、と挨拶をしておく。よろしく、と返してくる。その男の名前は、月島秋（つきしま／あき）といって、目についたのは赤髪だった。それから、耳のピアス。見た目は怖いが、中身はフレンドリーで、お前＜関所守＞やったの？　だとか、俺のことはアキでいいぜ、だとかを喋ってきた。

「なあ、七矢、お前の≪能力≫、教えろよ」

アキが言う。

「今日の四時から、能力調査、して貰うんだ」
「能力調査か！　お前、ありゃあ大変だぞ」
「そーなの？　学園長から話聞いたけど、怪我はしないって。アキもやった？」
「ああ、アキでいいよ。まあ、あれだろうな、能力調査は、相手にも因るだろうな。俺の能力調査の相手、俺のことボコボコにしやがるんだ」
「ホントに？　大変だね、それ」
「まあ、能力調査終わったら、俺らにすぐ能力のこと言えよ。クラスは全員仲間だからよ、能力は全員のを把握しとかなきゃな」
「アキの能力は？　ハジメの能力も聞きたいな」

「んー？　聞きてえか？」
アキが笑う。
「どおしよっかなー、教えてあげよっかなー」
ハジメが笑う。
「なにそれ？」
七が聞くと、いや、別に意味はねえけどよ、とアキが笑う。
「んじゃあ、能力調査終わったら、A組の鍛錬室まで来い。この棟の三階の、一番端。
B組とかC組とかの鍛錬室入っちまったら、『スパイだスパイだ』つってうるせえから、気をつけろよ」
「分かった。んじゃあ――体動かしたいし、そろそろ僕は能力調査の場所、行こうかな。闘技場って、どこ？」
「闘技場はねえ、ここから下駄箱に行って、外出て、それでそのまま左だよ」
「ありがとハジメ。んじゃ、また後で」
「おう」とアキ。
「うん」とハジメ。

七矢七の邂逅と調和

≪　『質疑応答を開始する』　≫

「質疑応答」《ノークエスチョン・ノーアンサー》――［九十九秀光］

＊＊

七が闘技場に入ると、既に先客――九十九秀光と式色獅子――がスパーリングをしていた。軽い準備運動程度らしい、二人とも何か話しながら、時折笑いながら、あまり速くない突きや蹴りの応酬。七は声をかけようか少し迷ってから、すいません、と声をかけた。金髪の男――獅子――は呼びかけに気付かない。眼鏡の男――秀光――が呼びかけに気付き、突きや蹴りを止めた。それから、こちらに近づいてくる。金髪の男も一緒に。

「お、七矢クンやん」

獅子が七の顔を見て、言う。秀光は、ああ、君が、といって、七に握手を求めた。

「生徒会長の九十九秀光だ。クラスは３－Ｂ。今回君の能力調査をさせてもらうよ」

「あ、はい、よろしくお願いします。七矢です。１－Ａです」
七は握手をして、それから獅子の方を見る。こちらの方は？　と七が目で聞くと、九十九が、獅子、自己紹介してやれ、と微笑む。
「ああ、俺、式色獅子、クラスは３－Ｂ、よろしゅうな」
「よろしくお願いします、えーと、式色先輩は生徒会じゃないんですか？」
「俺はヒデとふらふらしとるだけや」
俺の仕事の邪魔ばかりするんだ、と秀光が笑う。それから、腕時計を見た。三時半か、まあ、少し早いが、いいか、と言う。
「七矢くん、少し早いが、能力調査を開始したいんだが。恥ずかしい話、生徒会の書類整理が終わっていなくてね」
「はい、大丈夫ですよ」
「少し体を動かしてきたまえ」
「いやあ、大丈夫です。お仕事が積もってるのに、僕の準備運動程度に時間割くのは勿体ないですから」
「そうか、有り難い。それじゃあ、位置についてくれ、ルール説明はそこで」
闘技場の形は、簡単に言えば土俵だ。真ん中に二本線が引いてある。そこの間は五メートル。半径は二十五メートルの円の中で試合をする。
「闘技場には≪転生≫の陣がないから、死んだら終わりだよ、ビビ

ってないかい、七矢くん」
「ビビりまくりですよ」
「まあ、僕は今回能力を使わないし、君を殺す事もないから、安心してくれ」
「助かります」

獅子が、それじゃあ、行くぞと声をかける。
七と秀光が頷く。

「でもね、七矢くん」
「なんですか」

はじめ！　と獅子が叫ぶ。

「僕はイケメンが大嫌いなんだよ」

七矢七の攻撃と能力

蹴り！
七は右手でその蹴りを受ける。しかし、その右手は「受ける」と意識して出したものではなく、「危ない」と感じて出したものである。
飛んできたボールに目を瞑ってしまうような。
どんな跳躍力だよ、と七は思う。五メートルをひとっ飛びかよ、と驚愕。

「九十九先輩、妬みですか？」
「まあね！」

蹴りを受けた右手をそのまま秀光の顔面に持っていく。しかし秀光はそれをするりと避けて、一度後ろへ下がる。七はそれを逃さない。そのまま前に出て、左前蹴り。それも避けられる。どうなってんだよ、その眼鏡のせいかよ！　七は心の中で下らない事を言うと、後ろに下がる。

「うん、いい蹴りだ。速いしね」
「九十九先輩と、なんつうんでしたっけ、＜関所守＞？　どっちが強いんですか」
「僕だよ」
「そうですよねえ」
「早く能力見せなよ、七矢くん」

ざ、と地面を蹴って、七の前に切り込む。そのまま七の奥襟を持っていき、大外刈り！　綺麗に決まる。地面に叩きつけられた七は、唸って、それから秀光を振り払う。

呼吸止まりましたよ、と息も絶え絶えに伝えると、はは、と秀光は笑う。

「九十九先輩」
「なんだい？」
「ちょっとムカつきました」
「そりゃ怖い」
「そろそろ行きますよ」
「どーぞ」

ふふ、と笑って、九十九は腕時計を見る。試合が始まって三分二十五秒――二十六――二十七――。能力調査は十分以内に終了しなければならない。能力者の消耗を防ぐために作られたルールだ。

「君の能力には口上が必要かい？」
「いいえ、必要ありません」
「そりゃ便利だな」
「僕の能力の発動条件はね」

こうやって、と七は右手を掲げる。
秀光は時計をちらりと見る。――四十二――四十三――四十四――
「指を鳴らすだけですよ」

ぱちん。

――四十五――四――四十一――二十――百十八――千八百五十四――

時計は、時計は、時計は、時計は、時計は、時計は、壊れて、狂って、狂って、狂って、壊れて、ゆっくりと、分解、構築、分解、分解、分解、分解、分解分解分解壊れて狂って！

「――そして、回らない」

七矢七の能力――『回らない時計』《タイムアウト・エラー》、発動。

七矢七の説明と驚愕

『回らない時計』《タイムアウト・エラー》。
七矢七の能力であり、後に異名となるものである。
能力には様々な種類がある。が、『時間操作』――これに於いては、話が別だ。時間操作の能力は、『回らない時計』のみである。圧倒的な希少度の能力を、七は手にしているのだ。『時間停止』《タイムアウト》に、時間制限はない。何秒でも、何分でも、何時間でも、時間を停止することができる。

――しかし、副作用（エラー）が存在する。
『停止した時間分、能力者の動きが停止する』。
相手が一秒停止すれば自分が一秒停止する。
相手が一分停止すれば自分が一分停止する。
時間停止は諸刃の剣だ。「回避できない攻撃」を相手に与え、「回避できなくなる停止」を自分に強いる。

また、他にも様々な制約がある。先ず、『使用禁止』。時間が止まった時点で、ナイフ、銃等の武器類に触れれば、時間は自動的に回りだす。つまり、時間停止状態の中で、七は武器を使用することができない。それと、もう一つ。『一停止一発』。前述したとおり、七は時間停止の中で武器を使用することが出来ない。因って、攻撃方法は必然的に体術のみとなる。そして、この制約。時間停止の中、能力者が他人に触れた時、時間は回り始める。攻撃は体術のみなので、攻撃すれば必ず相手の体に触れる。時間は動き出す。副作用（エラー）で、

体は停止した時間分停止する。一停止、一発。勿論、副作用の停止後に、追撃することも可能である。ただし、

——九十九秀光には適わない。

七は正確に確実に順序よく要領よく時間を止め、そして秀光の顎を右の上段回し蹴りで蹴り抜いた。その間僅か一秒。

——時間が回る！

秀光は蹴られた方向へ倒れる

七の体に副作用が表れる。しかし、僅か一秒。一瞬だけ、体の自由が利かなくなる。が、すぐ動くようになる。顎に綺麗に決まった、まだ立てないだろう。七はそう判断し、倒れた秀光に右ストレートを打ち込む。

——が。

七は理解できなかった。何故、右ストレートが秀光の左手で止められている？

困惑。秀光は見逃さない。その右手を離さないまま、わき腹に蹴りを入れる。ぐ、と七が呻くと、右手を離して、腹に蹴りを入れて、七を吹き飛ばす。それから立ち上がる。

「君が指を鳴らしたと思ったら、君の蹴りが僕の顎に入っていた。綺麗に決まったから、視界が少し歪んで見えているよ。足元も少し覚束ない」

ふふ、と秀光が笑う。

どうなってんだあの人の体、と腹を蹴られ、呼吸するのが辛い中、

七は思う。顎綺麗にキメて、あれはねえだろ。
「七矢くん、『時間操作』だね。能力名を教えてくれ」
「『回らない時計』ですよ」
七は息も絶え絶えに言う。
「成る程、『回らない時計』。能力が分かりやすくていい名前だ」
七は腹を押さえながら立ち上がる。髪、乱れているよ、と秀光が言うと、ご丁寧にどうも、と乱れた髪を撫で付ける。

「九十九先輩」
「なんだい？」
「顎、決まりましたよね」
「ああ、ムカツく程にね」
「なんですか、その平気な感じ」
「丸薬を飲んだ。『身体強化』の丸薬だ。僕は体術が苦手でね。今日は能力が使えないから、少し薬品室からくすねてきた」
「セコい手ですね」
「能力調査も楽じゃないんだ」
「能力使えばいいじゃないですか」
「学園長から、使ってはいけないって直々に言われてるの。それに僕の能力使ったら――」
秀光が口角を上げる。
「君なんか、相手じゃないから」

七矢七の罵詈と雑言

――話が突然変わるが、ここで、七矢七の生い立ちを語る事にする。

七矢七に、能力に目覚めた、という表現は相応しくない。能力が備わっていた、が正しい。生まれたときから、七矢七は『回らない時計』を扱えた。つまり、先天的（ネイティヴ）。

しかし、成長は普通の男の子と変わらなかった。皆と同じくらいの年に寝返りを打ち、皆と同じくらいの年に立ち上がり、皆と同じくらいの年に言葉を喋れるようになった。

幼稚園や保育園には行かなかった。そして、小学校。

七は教師に嫌われた。というのも、七の性格に因る。

物静かな雰囲気で、しかしながら誰に対しても人当たりがよく、容姿も良い。

ただし、些細な事で、異常にキレる。

少し悪口を言われただけでも相手をひどく罵った。

後に、七は『回らない時計』以外の異名でも知られるようになる。

――『罵詈雑言』《ヘビースピーカー》である。

秀光は倒れた。腹部に鈍痛。七が能力を発動したのか、と理解する。身体強化の丸薬がなかったら、すぐには動けないんだろうな、

と思いつつ、秀光は次の攻撃に備える。
七は先ほどと同じ、右ストレートを放つ。芸がないな。それを先ほどと同じく左手で受け止める。先ほどと同じ、回し蹴り。
が、秀光は見る。七の指。
ぱちん。

秀光の顔に衝撃！
地面に後頭部が叩きつけられる。
（連続発動――可能なのか！）
七が口を開く。
「クソメガネ、まだ終わンねーぞカス」
『罵詈雑言』《ヘビースピーカー》としての七を学園内で初めて見たのは、九十九秀光であった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9843u/

七矢七の学園と生活

2011年7月23日19時23分発行